

令和7年度 我が校の学ぶ力向上策

【市町 目標】

IKOKA学習デザインを基盤とした、主体的・対話的な深い学びの実現を目指し、学ぶ楽しさを実感し、確かな学力を育む教育の充実

- 「読み解く力」向上を図るための授業開発、実践の推進を図る。
- 「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」のツールとしての効果的なICT活用の促進を図る。
- いじめを許さず、支え合い学び合う集団を育てる学級、学校づくりの充実を図る。

【学校 目標】

○こうか授業術5箇条の推進と家庭学習、読書活動の充実を図るとともに、『つたえる力』『読み解く力』の向上を図るための授業研究、実践の推進を図る。

- 「あいさつ運動」「ボイスシャワー」「人権教育」を通して、自己肯定感を高め、学びを支え合う「つながる」集団づくりを進める。
- 「校内研究」「OJTの推進」を通して教職員の授業力向上を図り、子どもの自己有用感をはぐくむ共通実践を充実させる。

【現状と課題】

○視点1 話し合い活動や表現活動での「つたえる力」を育み、基礎学力の定着を基にした「読み解く力」を発揮する、子どもが主体の授業づくりを推進する必要がある。(思考ツールとしてのICT活用・基礎基本の定着のためのAIドリル活用)

○視点2 安心して学び合う学級づくりはできてきた。次は、自己肯定感を育み、互いのよさを認め合う集団づくりを進める必要がある。

○視点3 学年部、3部会を組織し、共通理解⇒実践で、職員全体が同じ取組、実践ができるような学校づくりを進める必要がある。

取組事項および評価指標

※評価：【達成状況 90%以上→A 70%以上90%未満→B 70%未満→C 時期→1回目：9月 2回目：2月】

※達成状況の割合(%)は、目標数値に対しての達成状況の割合です。

【視点1】子どもたちが主体の授業づくり			
取組事項	評価指標	1回目評価	2回目評価
○話し合い活動や表現活動での「つたえる力」を育み、基礎学力の定着を基にした「読み解く力」を発揮するための手立での研究…【「つたえる力」「読み解く力」】 ①「こうか授業術5箇条」を推進し、楽しく分かる授業づくりをめざす ②「つたえる力」「読み解く力」を育む授業づくりの推進(校内研究)→説明する力、主体的に話し合う力の研究 ③AIドリルの活用と情報活用能力の育成	①児童用アンケート「算数の授業の内容はよく分かるか。」肯定的回答を80%以上に。	A	A
	②児童用アンケート「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができているか。」肯定的回答を80%以上に。	B	A
	③児童用アンケート「ICT機器を使うことで、自分の考えを表現したり、友達の考えがよく分かったりするようになるか。」肯定的回答を80%以上に。	B	A

【視点2】学びを支え合う集団づくり			
取組事項	評価指標	1回目評価	2回目評価
○あいさつ運動やボイスシャワーなどの取組で自己肯定感を育み、一人ひとりが互いのよさを認め合うための手立て…「つながる力」 ①学び合い、認め合いの場と機会を設けるとともに、学習活動をはじめ、児童一人ひとりの人間性を認め、よさを伝える。《全職員ボイスシャワーの取組》《全学年QUテスト》《全校スピーチの取組》《たてわり活動の充実》	①児童用アンケート「自分にはよいところがあるか。」肯定的回答を80%以上に。	A	A
	①児童用アンケート「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら、課題の解決に取り組んでいるか。」肯定的回答を80%以上に。	A	A
	①児童用アンケート「困っているときに、周りの友達にいつでも相談できるか。」肯定的回答を80%以上に。	B	A

【視点3】協働して取り組む学校づくり			
取組事項	評価指標	1回目評価	2回目評価
○教職員の授業力向上(校内研・OJT)と共通実践《めざましタイム》(家庭学習の充実)《読書活動の充実》(AIドリルの活用)…「つらぬく力」 ①教職員の子どもを多面的にみる資質の向上 ②家庭学習・読書活動の充実 ③基礎学力の定着	①児童用アンケート「学校は、毎日楽しいか。」肯定的回答を80%以上に。	A	A
	②児童用アンケート「学校の授業以外に、月～金曜日、1日当たり学年×10分以上、家庭学習に取り組んでいる。」肯定的回答を80%以上に。	B	B
	③児童用アンケート「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考えているか。」肯定的回答を80%以上に。	A	A

◇手立ての検証

- ・4月の職員会議において校長が教育目標や学校経営等について伝える。それを受けて研究推進委員会を組織し、評価指標を協議する。また、学ぶ力向上推進リーダーが「学ぶ力向上策」について校内研究全体会で説明するとともに、それぞれの取組事項に対する具体的な内容について協議する。さらに、取組事項は学校だよりで保護者や地域に発信する。
- ・全員で取り組む具体的な内容について共通理解し、校内研究主任が中心となって、組織的な実践につなげる。
- ・校内研究会で、取組の状況等を共有し、全国学力・学習状況調査等の調査における数値や児童用アンケート(6月)の数値をもとに、改善策についてまとめ、後期の実践につなげていく。(8月)
- ・児童用アンケート(12月)や学校評価アンケートを受け、2月の校内研究全体会で、今年度の取組の検証や来年度への改善点を話し合う。

今年度の取組の成果と課題

視点1の②では、2学期に行われた校内研究会では、交流場面での「話し合いの手立て」に特化して研究を進めてきた。到達度評価のABC層で構成された、3名を1グループにして話し合うといった交流のスタイルを検証し、ブラッシュアップさせてきた。「学級の友達との間で話し合う活動を通じて」まではどのクラスも達成できたと言える。しかし「自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすること」については、今後も研究の余地がある。次年度は「自分の考えを深める」「新たな考えに気づく」とは、どういった姿を検証していく必要がある。

視点2の①では、今年度実施した「学級づくり/集団づくり(人権的な視点)」研修会は有意義だった。年2回(4月、9月)行うことは継続し、児童の気持ちに寄りそった「発達支持的生徒指導」の共通実践に活用していく。また、特別活動(委員会・学級会)などの主体的な取組を継続して行い、自己有用感を育む実践につなげていきたい。視点2の①では、児童用アンケート「自分にはよいところがあるか」では、肯定的回答が87%と、高得点を維持している。今回の要因を検証し、次年度の学級経営に役立てたい。